

姫路城の軒瓦

姫路城は、池田輝政によって慶長6年(1601)より豊臣期の城郭が大規模に再築され、同14年(1609)に天守が完成しました。この時、天守などに使われた瓦は時代の変化をよく表しています。

展示している軒平瓦・軒丸瓦の文様には揚羽蝶あげはちょうが用いられています。揚羽蝶は池田氏の家紋で、輝政の父信輝(恒興)が織田信長から与えられた麻袴かみしもに蝶文が付いていたことが由来となったとされています。権力者から許された家紋が、瓦に使われ始めるのは豊臣政権後半期の16世紀末頃で、大名家の政治的なアイデンティティーが瓦にまで示されるようになりました。

軒平瓦は、文様を入れた部分(瓦当部)が逆三角形で雨水がしたた滴るような形をした滴水瓦てきすいと呼ばれるものです。滴水瓦は当時の中国や朝鮮半島で多く用いられていたもので、文禄の役(1592・1593年)・慶長の役(1597・1598年)で朝鮮半島に出兵した大名が、帰国後その居城に取り入れたとみられています。輝政は朝鮮への出兵に参加していませんが、ちょうど築城時に流行した滴水瓦を採用したのでしょう。

(学芸課長 池田征弘)



姫路城(姫路市) 軒平瓦(滴水瓦)・軒丸瓦
当館蔵(福原会下山人コレクション)